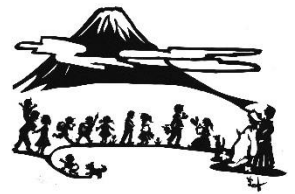


学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第 8号】
平成 30 年
12 月 18 日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

情報発信の媒体 新聞離れは若者だけ？

教育部長

鈴木 秋広



十三年ぶりの県市町対抗駅伝優勝で号外の配布や優勝セレモニーと大いに盛り上がりを見せた駅前広場にもイルミネーションが点灯し、このところの朝晩の冷え込みも手伝つていよいよ師走を感じるようになっていきました。私のような年齢になると誰しも一年の経過がとても速く感じるのですが、ご多分にもれず私自身にとってもあつという間の一年でありました。

様々な違いがあるようです。情報収集の手段のひとつで、最近では、ニュースはネットで十分とばかりに新聞を購読しない若者も多いのだとか。こうした中、先日の市の若手職員研修会でのできごと。教育部長より、若手職員に「新聞を読んでいるか」と質問したところ、ほとんどの職員が「読んでいない」と回答したことに愕然としたという話をお聞きしました。これには私自身も少なからずショックを覚えました。なぜなら我々が

日常業務を行うにあたり新聞は広報として必要と並び市民の皆様への情報発信の重要なアイテムのひとつだと認識しているからです。

「若者の活字離れ」という陳腐な常套句の対象として挙げられるもののひとつに新聞があり、若者の新聞離れは新聞業界にとつてかなり深刻な問題のようですが、この新聞離れは若者に限ったことと捉えてよいのでしょうか？総務省やNHKなどの調査によると、情報収集の主な手段として新聞を挙げている人は三代以下がそれ以上の世代に比べて極端に少ない結果となつていきます。家計の収入減により新聞購読をやめたとか、朝の忙しい時間帯にわざわざ新聞を広げるよりスマホで必要な情報だけをチェックする方が手軽で便利というのが主な

理由だとか。

ここで自分自身の行動を振り返ってみると、確かに朝は地方新聞のローカル面をざっと目を通す程度でややもすると帰宅後のチェックを忘れることもしばしば。ひよつとすると新聞離れはなにも若者に限ったことではないのかもしれません。

新聞を読まなくなった理由として記事の質の低下や権力に迎合した記事が読者離れに繋がっていると分析する評論家もいますが、ネットを開けばより早く多くの情報が無料で得られるという現実、つまり最大の要因は「代替品が溢れているから」につきるのではないのでしょうか。

稚拙な文章が散見するネット上の記事に比べ、文章構成などがしっかりとした新聞記事は読解力や作文力を高めるといった教育面でははるかにメリットが大きく、役立つことは間違いないと思います。新聞離れに歯止めをかけるのは業界関係者等にお任せするとして、我々行政に携わる者としては現実をしっかりと認識したうえでSNSをはじめ新しい媒体を積極的に活用してい

く必要があるようです。フェイクニュースには気をつけて。

教師力向上講座「架け橋」

第三回架け橋「次期学習指導要領で求められる資質・能力を育む授業」(講師 御殿場中学校 服部 圭吾 先生)が、十月二十五日に行われました。服部先生は、授業改善の視点を山登りに例えながらわかりやすく解説し、単元構想の重要性を伝えてくださいました。講義の最後には、新たな視点でじっくりと単元構想と向き合っている先生方の姿がとても印象的でした。

正直なところ、私は一時間の授業をつくることで精一杯なところがあります。身に付けた力よりも「こうすれば楽しくなるのではないか」という考えで授業を作ってしまう。今回の講義で「目標とする生徒の姿」をイメージしただけで、取り入れてみたい授業や手だてが思い浮かんできました。

子供の実態と身に付けたい力をかけ合わせた授業が開発されていくことを期待しています。

第四回架け橋「子供が変わると学級づくり・授業づくり

が変わる」(講師 御殿場南小学校 新澤 章彦先生)が、十一月二十九日に行われました。

通常学級の教師は、どうしても一つの目標に向けて子供たちを指導しようとします。そして、扱いきれない子供たちを、教師の立場で「困った、どうしよう」と考え始めます。しかし、「この子はどこでつまづいているのか」等、子供の立場になって困り感を共有しようとする姿勢は不十分です。新澤先生の講義は、そんな私たちの指導を見つめ直す、良い機会となりました。

宿題をやっていない子や言い方が強すぎる子たちを「手がかるなあ」とつい思ってしまいますが、一番困っているのは本人なんだと感じました。行動の裏にかくれている「その子供たちの本当の思い」を見通さないようにしたいです。

新澤先生が実践しているように、子供たちのニーズに寄り添った指導の在り方を模索していく教職員がもっと増えていくことを期待しています。

教育指導センターから

風薫る

一人一人の子供の確かな学力を育むために

教育指導センター指導員

勝又 康次

◎授業で大切にできたこと

県は魅力ある授業を実現するための方法を見直し、学びの創造を推進してきました。学校では一人一人の子供のよさを引き出す子供理解と教材を徹底的に分析して学びの楽しさに導く教材研究を大事にしました。次の「学びの実感」へと目標がつながり、授業づくりを支える学校体制や学習の基本的な技術が示され、教師がチーム力を発揮して授業改善を進めていくことを大切にしていきます。

◎一人一人の子供の学力を育む実践例

十一月、御殿場南小学校特別支援(自閉症・情緒)学級の算数の授業。一年生から六年生の七名の子供たち。一年生二名は「ひきさん2」、三・四年生二名は「あまりのあるわり算」、六年生三名は「分数の四則計算・複合図形の面積」

の二グループに分かれて学習します。担任の新澤章彦先生は、子供の学習意欲の継続と学習内容の定着を重視し、次の三つの学習活動を授業の柱としています。

一、導入段階、既習事項を確認しながら、挙手して発表することや具体物を操作する機会を確保する活動。二、展開段階、学年を基本とした学習グループ、体験活動を可能な限り取り入れた学習活動。三、まとめの段階、プリントやゲームで意欲の継続を図る活動。

この三つの学習活動を繰り返すことで、子供たちは学習活動に見通しを持ち、安心して学習活動ができるようになりました。

九組の授業が始まりました。全員が一時間の学習の流れをしっかりと確認します。この時に前時と同じことと違うところが伝えられ、子供は安心して学習に向かいます。そして、一年生二名と三・四・六年生に分かれて前時までの振り返りをしました。授業開始八分で担任と二人の支援員による三丁の授業が三つの学習グループで始まりました。教室前



振り返りに加えて、次の授業の学習活動の内容と順序が丁寧に確認されました。

◎時間をつくり、人を大切にしたいチーム力

ティームティーチングで大事なことは、個々の子供の実態把握とそれぞれの教師が自分の出番や関わり方を共通理解していることです。御殿場南小学校の九組では、四月から授業の基本スタイルを決めることで、支援員の関わり方を分かりやすくしています。

担任の新澤先生がどのグループの学習活動も計画し、支援員に三つの学習グループのねらいと関わり方を伝えて、七人の子供の学習内容の共通理解を図っています。毎日、授業中や授業終了後、すぐに今日はこんなところがよかった、明日はこんな授業内容にしよう、などと反省し、次時の構想を練ることを重ねています。限られた時間の中で支援員との打ち合わせの時間をつくり、授業の目標と内容を共通理解します。今日も、一人一人の子供の確かな学力を育む、支援員の活動を大切にした三つのグループでの学習活動を継続させていきます。